IS　二人目の男性IS操縦者は転生者？

メテオ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ　二人目の男性ＩＳ操縦者は転生者？

【Ｎコード】
Ｎ８１９０Ｗ

【作者名】
メテオ

【あらすじ】
神のせいで死んだオリ主が転生し、ＩＳの世界で原作ブレイクをやりまくる小説です
文才がほとんど無くて、いつもは、読んでばかりですが・・・
（２つ小説を書いていますが、こちらをメインにします）

第1話　プロローグ（前書き）

はじめに誤ります

文才無くて　御免なさい

第1話　プロローグ

テンプレ乙といえば、大体の方は分かるでしょう。

分からない方のために説明します
テンプレ乙とは、小説等で神が誤って死なせてしまったお詫びに転生する権利を与え、更に願いをいくつか（大抵は３つ）かなえて、転生をさせるということです

僕の名前は上条　朋希だ

そして僕は今全てが真っ白い空間にいました
「ここはどこだ？」
『死後の世界・・・といったら分かるかの？』
「ああ、そういうことですか、あなたが神様で、僕を誤って死なせてしまったということですか？」
『な・・・なんでわかるんじゃ？』
「だってテンプレですから」
『・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・』
「ところで死因はなんですか？」
『窒息死じゃ、一応即死ということになってるぞい』
「ああ、そうですか」
『そういうことじゃ』
「あ、そういえば行く世界と姿は願いに含まれませんよね？」
『もちろんじゃ』
『そういえばお主現世に未練は無いのか？』
「ありません。あるといえば、好きだった幼馴染に告白できなかったことと、買ってきたＩＳ７巻を読めなかったということでしょうか？」

『ならＩＳここで読むかえ？それと幼馴染の名前は何じゃ？』
「あ、はい。読みます。あ、幼馴染の名前は絹本　瑞樹です」
（１巻から全部読んだ）

～数時間後～

「読み終わりました」
『でどこの世界じゃ？』
「ＩＳの世界じゃ」
『やはりな。それ位予想できたわい』
「それで、姿は普通以上で任せます」
『分かった』
『ちなみに何個でもいいぞ』
「欲しい能力は
・王の財宝
・ＩＳ適正ＳＳ
・スーパーコーディネーター並みの能力（それも篠ノ之　束を超える天才と織斑　千冬を超える運動能力）
・後からでもお願いを追加できるように通信できるようにすることの以上です」
『分かった』

『もうそろそろいくかえ？』
「はい。何から何までありがとうございました」

第1話　プロローグ（後書き）

オリ主の名前を募集します
感想に書いて送ってください

第2話　ＩＳ学園に入るまで

ＩＳ学園に入るまでを省かせていただきます
理由は作者の技量不足です
まあ回想で簡単に語らせていただきます

～回想～

３歳のとき事故で両親を亡くす
その後は２０才の兄と２人で暮らす

５歳で天才を発揮し、篠ノ之　束に気に入られる（織斑姉弟と、篠ノ之　箒は既に友人関係）
ただし、ＩＳの開発前にフランスに飛んでいる

フランス

６歳ぐらいのときシャルロット・デュノアと友人（幼馴染）になる

１３歳のときに日本に戻る

一夏や鈴、弾と同じ学校、同じクラスになる
凰　鈴音、五反田　弾と友人になる
また、篠ノ之　箒が引っ越すのは中学１年の夏休みが終わってから１ヶ月程度たってからとなっている
そのため、凰　鈴音と篠ノ之　箒はお互い友人（親友？）になっている

愛越学園の入試試験のとき、道に迷っていたが、（主に一夏のせい）

一夏が「ここであってる」といって入ったが、そこにはＩＳが有り、
二人とも動かしてしまう

ＩＳ学園に強制入学させられる

～回想終わり～

第3話　クラスメイトは全員女？

～一夏視点～

「はいっ　副担任の山田真耶です」
「みなさん　一年間　よろしくおねがいしますね」
「えっと　じゃあ最初のＳＨＲ（ショートホームルーム）は」
「皆さんに自己紹介をしてもらいましょう」

今日は高校の入学式
新しい学校
新しい教室

だが俺を緊張させているのはそんなことではない

では何か？

決まっている

俺以外のクラスメイトが一人を除き全員女だからだ
え・・・一人を除き・・・・・・
ってえええええええええええええええええええええええ
ええええええ

だが、想像以上にきつい・・・・・・

「――――――――くん」
「――――くん」
「織斑一夏君」
「はっ　はいっ」
「ひゃっ！？」
「あ　あの　お
大声出しちゃってごめんなさい
お　怒ってる？
怒ってるかな？
ゴメンね　ゴメンね！」
「でもね　あのね」
「自己紹介って「あ」から始まって今「お」の織斑君なんだよね」
「いや　あの　そんなに」
「謝らなくても・・・」
「しますから」
「自己紹介しますから」
「ほ・・・本当ですか？
や・・・約束ですよ！絶対ですよ！断ったらＩＳで倒しますよ！！！」
こ・・・・・・・怖い
「えー　えっと　織斑　一夏です」

「よろしくおねがいします」

うぅ・・・ここでなんか言わないと暗い奴のレッテルをはられてしまう・・・・・・

「い・・以上です「バシィィン」」

「お前はもう少しまともに自己紹介できんのか馬鹿者」

「いや千冬姉・・・俺は・・・」

「学校では織斑先生と呼べ」

「・・・はい織斑先生」

「・・今のって」

「織斑君って・・・」

「ひょっとして・・・」

「じゃあＩＳを動かせるのもそれが関係して・・・」

「いいなぁ変わって欲しいな～・・・」

「そういえば苗字も一緒だし・・・」

やべ・・・ばれた

～一之瀬視点～

「都合で遅れてきた奴がいる　入れ」

「はい」

「一之瀬　拓海です

趣味は機械いじり、特技はスルースキルと読心術、平行思考ですちなみに平行思考は一度に１００以上やったことが有り、ＩＳでオー

ルレンジ攻撃を行える機体があれば、多分ビットを動かしながら移動し、攻撃すること等が出来ると思います
よろしくお願いします」

「「「「「キャーーーーーーーーーーーーーーーーーー」」」」」

「織斑君と同じでイケメンでちょっとクールっぽい～～～～～～」

「騒ぐな　静かにしろ」

「一之瀬お前の席は真ん中の列の一番後ろだ」

「はい、分かりました」

「諸君　私が織斑千冬だ　君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ」

「出来ないものには出来るまで指導してやる　逆らってもいいが私の言うことは聞け　いいな」

「キャー本物の千冬様よ！」

「美しすぎます」

「愛してます！」

「恐れ多くてお顔を見られません」

「ずっとファンでした」

「お姉さまにあこがれてこの学園に着たんです。南九州から」

「私お姉さまのためなら死ねます」
最後から2番目の奴南九州よりも遠いところから着てるのもいるんだぞ
最後の奴恐ろしい子というな
「・・・・・毎年良くもこれだけ馬鹿者が集まるものだ
関心させられる」
「それとも私のクラスにだけ集中させられているのか？」
おそらく後者ですよ
「まあいい　これでＳＨＲは終わりだ
諸君らにはこれからＩＳの基礎知識を半月で覚えてもらう！！
その後実習だが基本動作は半月で体に染み込ませろ
いいか　いいなら返事をしろ
良くなくても返事をしろ
私の言葉には返事をしろ」

「拓海、箒のところいくか？」
「いや、遠慮しとくよ。二人っきりで話しておいでよ」

「箒、話がある。屋上でいいか？」
「ああ、構わない」
「あ、僕はここで待ってるよ。二人っきりで話しておいで」
「ああ、分かった」

「ふー」
「・・・・・・・・・・」
「久しぶりだな箒」
「え？」
「直ぐ箒ってわかったぞ」
「髪型、昔と同じだしな」
「・・・・・・よく覚えているものだな」
「そりゃ覚えてるって」
「幼馴染のことぐらい」
「　　」
「そういえば去年剣道の全国大会で優勝したってなおめでとう」
「なっなんでそんなこと知ってるんだ！？」
「何でって新聞読んだし」
「なっなんで新聞なんか読んでるんだ！？」

「べ「キーンコーンカーンコーン」やば、予報だ急がないと」
「ああ、そうだな」

第４話

「それではこの時間は実践で使用する各種装備の特性について説明を・・・・・・」
「ああ、その前に」
「再来週のクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」
「は――――い！！織斑君がいいと思います！」
「私も私も」
「そーだねせっかくだし！」
「納得できませんわ！！」
「そのような選出は認められません！」
「大体男がクラス代表などいい恥さらしですわ」
「このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか？」
「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然です！」
正直この手合いは苦手だ
今の世の中ＩＳのせいで女性はかなり優遇されている
優遇どころかもはや女＝偉いの構図にまでなっている
つまりそういう女子が目の前にいた
「いいですか！？クラス代表は実力トップがなるべき、つまりそれは私ですわ！」
「何せわたくし入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

「イギリス代表候補生である私以上にふさわしい人間はいないはずですわ」
「入試ってあれか？ＩＳ動かして戦う奴」
「それいがいにありませんわ」
「それだったら俺と拓海も倒したぞ」
「なっ！！」
「あなた方も教官を倒したって言うの！？」

「えーっと多分」
「僕は倒したよ。そこにいる織斑先生を。正確には３時間戦って決着がつかなかったから残りシールドエネルギーの判定で勝っただけだけどね」

「な・・・なにをおっしゃっているのかしら極東の猿は」
「へ～君そんなことを言うんだ、じゃあ織斑先生に三時間以内で倒せる自信があるの？僕はないけどね。というよりは各国の代表でも勝てないと思うけどｗｗ」
「決闘ですわ」
「いいぜ四の五のいうよりわかりやすい」
「僕も別にいいよ。あ、織斑先生、僕自推でお願いします」
「分かった」

「決闘は一週間後の月曜日。第３アリーナで行う」
「「「わかりました―（わ）」」」

「え～っと織斑君どこか分からないところがあったら言ってくださいね
何せ私は先生ですから」

「じゃあはい」

「はい！織斑君」
「ほとんど全部分かりません」
「え・・・全部ですか」
「織斑、入試のときにもらった参考書はどうした？」
「あ、タウンページみたいな奴ですか？それなら間違えて捨ててしまいました」
バコンＸ５

一之瀬視点

「よかった　織斑君と一之瀬君まだ教室にいたんですね　えっとですね寮の部屋が決まりました
「織斑君が１０２５室で篠ノ乃さんと相部屋で一之瀬君が１０２６室の二人部屋を一人で使ってもらうことになります」
「「わかりました」」

「え～っと１０２６　１０２６っとここか」

「ふぅ～広い」

「みっみるな――――――――――――――――――――――――!!!!」

「なんだ?箒の声みたいだけど。ま、いいや」

一之瀬視点

「そういやさぁ・・・」

「なんだ?」

「ISの事教えてくれないか?このままじゃ来週の勝負何も出来ずに負けそうだ」

「くだらない挑発に乗るからだ。馬鹿者め」

「そのをなんとか頼む」

「・・・」

あれ?俺空気?・・・・・

「ねえ」

「君たちって噂の子でしょ？」
「はあ・・・多分」「おそらくあってると思います」
「代表候補生の子と対戦するって聞いたけどホント？」
「「はい、そうです」」
「君たちさ・・・ＩＳの稼働時間はどのくらい？」
「俺は２０分ぐらいです」
「俺は５００時間ぐらいです」
「え・・・なんでそんなにのってるの？」
「口止めされてるので言えないです」
「そっか・・・」
「でも織斑君のほうは無理だと思うよ？
稼働時間に比例して上達するのよ？・・・絶対無理ね」
「私が教えてあげよっか？」
「ＩＳのこと」
「はい、ぜ「それなら私が教えますので結構です」
「え・・」
「あなたも一年でしょう？私の方が「私は篠ノ之　束の妹ですから」
「篠ノ之って・・・ええっ！！」
「そ・・・そうそれなら仕方ないわね」
「あなんかスイマセン」

「・・・なんだ」
「なんだって・・・いや教えてくれるのか？」
「そう言っている」

「今日の放課後剣道場にこい
一度腕がなまっていないか見てやる」

翌週月曜日
クラス代表戦当日　第３アリーナ

「なあ箒・・・」
「なんだ一夏」
「この一週間剣道しかしてこなかったんだが」
「ＩＳの事教えてくれる約束はどうなったんだ？」
プイッ
「め　を　そ　ら　す　な」
「なあ箒・・・あとでＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩしようか」
「・・・・・・・・・」ガタガタブルブル

「織斑君織斑君織斑君織斑君織「無限ループ終わってください」
「あ・・・はい」
「それでですね、来ました。織斑君せんようのＩＳ「百式・・・じゃなかった白式です」

「背中を預けるようにしろ・・・ああそうだ」
「後はシステムが最適化してくれる」
「ハイパーセンサーは問題なく動いてるな。一夏気分は悪くないか？」

「大丈夫千冬姉いける」
「箒、拓海。行ってくる」
「勝ってこい」「逝ってこい」
「拓海・・・流石にそれはつらいぜ・・・」
「まあ勝ってこい」
「分かった」

第5話

「――――――――――27分　よく持ったほうですわね」
「そりゃどうも」
「でもさらさら負ける気はないんでねッ」
ビットを1機ずつ確実に減らしていく
「ハァァァァ」
「おあいにくさま。ブルーティアーズは六機ありましてよ」
「ミサイル！？」
「一夏ぁ！！！！！」
「案外しぶとかったですが、所詮この程度ですの」
「いや　まだ終わっていない」
「なっ！？一時進化（ファーストシフト）！？これまで初期設定で戦っていましたの！？」
「俺も俺の家族を守る」
「はぁ？あなた何を言って――――――――――」
「とりあえずは千冬姉の名前を守るさ」
「だから何の話を」

「うおおおおおおお」バコォォン

「ふぅ、特攻を仕掛けてきたときはどうなったのかと思いましたが、単純で助かりましたわ」

「もし特攻を仕掛けてこなかったら今頃どうなっていたか・・・・・・」

『シールドエネルギーエンプティ――勝者　セシリア・オルコット』

「よくもまあ持ち上げてくれたものだ」

「それで特攻を仕掛けてこのざまか」

「大馬鹿者が」

「よし、次だ一之瀬、３０分後にオルコットとの試合開始だ」

「ハッ了解です」

バシン

「ここは軍隊じゃなくて学校だ」

「イ・・・イエスマム

――３０分後

「一之瀬　拓海　ＲＸ―７８　行きまーす」
「なっフルスキンタイプ！？そんなの見たこと有りませんわ！？」
「まあ多分そうだろうな。宇宙活動も出来るようにしたし、大気圏突入システムもつけたから、宇宙空間でも使用できる、しかもブースターで普通に宇宙に出れる」
「あ・・・ありえませんわ。そんなのどこで・・・」

『それではセシリア・オルコット対一之瀬　拓海の模擬線を始める』

『バトル　スタート』

ハイパーバズーカ「バコォンバコォンバコォンバコォンバコォンバコォンバコォンバコォンバコォン」
「な・・・なんですの！？」
「まだまだ続くぜェ」
ビームライフル２丁流＋頭部バルカン「パコンパコンパコンパコンパコンパコン」
現在シールドエネルギー拓海３００セシリア１００
「フルバースト」バコォォォォォォォン

『――セシリア・オルコット、シールドエネルギーエンプティ
――勝者　一之瀬　拓海」
観客席にいたメンバー「「「「「え？な・・・なに？何が起こったの！？」」」」」

「織斑・・一夏・・・
知りたい・・・彼のことをもっと・・・・・・・」

「はーいという訳で・・・」

「一年一組クラス代表は織斑一夏君に決定で～す」
「あ！一つながりでいい感じですね～」

「先生！俺は負けたんですよ
何でクラス代表に・・・」

「それは俺と」「私が辞退したからですの」
「まあ・・・確かにあなたは負けましたが、しかしそれは考えてみれば当然のこと」
「このセシリア・オルコットが相手だったのですから、それは仕方

ないことですわ」
・・

「それで・・・まぁ私の大人気なく怒ったことを反省しまして一夏さんにクラス代表を譲ることにしましたの」
「何よりＩＳの操縦には実践が何よりの糧」
「代表ともなれば戦いには事欠きませんもの」

「ちょっとまて！素人なのは拓海も同じだろ！」
「お前と一緒にするな！ＩＳの稼働時間は５００時間ぐらい越えている！！」
「」ガボーン・・・・・・
「そ・・・それでですね」
「私のように優秀かつエレガント
華麗にしてパーフェクトな人間がＩＳ操縦を教えて差し上げれば一夏さんもみるみる」

「あいにくだが、一夏の教官は足りている」
・・
「私が直接頼まれたからな」
「あら、あなたはＩＳランクＣの篠ノ之さん」
「Ａの私に何か御用かしら？」
「ラ・・・ランクは関係ない！私が頼まれたといっている」

「座れ馬鹿ども！！」
「一之瀬以外のランク等私に比べたらまだまだひよっこだ」
「あの～先生。なんで一之瀬君以外なのでしょうか？」
「ああ、こいつはランクＳＳだ」
「「「「「「「「「「「「「「「「「え～！！！！！！！！」」」」
」」」」」」」」」」」」」」」」」」

「な・・・SS・・・・・・」
「ちょ・・・織斑先生ばらさないでくださいよ」
「クラス代表は織斑一夏依存はないな」
スルーされた・・・
「「「「「は━━━━━━━━━━い!!」

「ふうん・・・」
「ここがIS学園」
「ここにあいつがいるのね・・・」

「まさかあいつ達がIS操縦者になるなんてね・・・」

「うぅ・・・・・・迷った・・・」
「あっ鈴!ひょっとして迷ったの?」
「そうよ!拓海ありがと〜」
「いいって。着いてきて、案内するから」
「わかったわ」

「はい。凰鈴音さん。これで転入手続きは終わりです」
「あの～織斑一夏って何組ですか？」
「ああ、あの噂の子ね。それなら一組だから同じクラスだね。なんでもクラス代表になったそうよ。流石織斑先生の弟さんですね」

第5話（後書き）

うぅ・・・・・・戦闘シーンを書くのが難しい・・・・・・

誤字、脱字有りましたらお知らせください

お知らせ

突然で申し訳ございません

この小説の主人公の名前を変更します

たなせ　まさき　　いちのせ　たくみ
田名瀬　正木　↓　一之瀬　拓海

以下次数稼ぎです。。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・

第6話　転校生はセカンド幼馴染

「ねえねえ聞いた？この噂」

「このクラスに中国代表候補生が転校してくるらしいよ」

「転校生ねぇ・・・」

「私の存在を危ぶんでの転校かしら」

「いや、多分僕と一夏だと思うよ。どこの国にしても取り入れたいと思うし」

「ああ、多分そうだろうな」

「代表候補生か・・・どんなやつなんだろうな」

「きになるんですの？」「きになるのか？」

「ああ、多分強いと思うから戦ってみたい」

バトルマニア

「「　戦闘狂　でしたの（だったのか）！？」」

「いや、そうじゃない。戦いたいだけだ」

「一夏、それをバトルマニアと呼ぶんだよｗｗ」

「そんなわけないだろ」

「ってあれ？逃げるのか？」

バコン

「席に座れ。織斑」

「ご指導ありがとうございます織斑先生」

「あの～織斑先生、中国代表候補生が転校してくるという噂があるんですけど本当ですか？」

「ああ、本当だ。丁度今から自己紹介をする。入って来い」

「中国代表候補生　凰鈴音よ。好きな食べ物はラーメン。特技は中国拳法、よろしくね」

～時間は飛んで休み時間」

「鈴久しぶりだな」「鈴ひさしぶり」

「そうね。箒とは3年、一夏と拓海は一年ぶりだし

「それにしてもいつの間に代表候補生になったんだ？」

「ああ、それは中国に入ってから、色々あってとりあえず適正を調べたの。それでＡ＋でその後カクカクシカジカで代表候補生になったの」

「「「そうなんだ」」」

「一夏さん？この方との関係は何ですの？」

「ああ、セカンド幼馴染だ」

「そう・・・ですの」

〜キ～ンコ～ンカ～ンコ～ン〜

「やば、早くしないと授業始まる

「そうだね」

「ええと2時間目の授業ではＩＳの知識を高めます

皆さんはＩＳのコアが４６７個しかないのは知ってますよね

それでどうして「山田先生、ちょっと待ってください。それに間違いが有ります」

・・・・・・・・

「ＩＳのコアは４６７こしか公表してないだけで実際にはもっとあ

るはずですよ？」
「そうですよね織斑先生」
「ああ、そうだ。あの天災なら多分そうだと思う」
「ああ、それと僕が知っている限りでは、ＩＳのコアは２０００個を超えてますよ」
「一之瀬君そんなにあるわけないよ。というかなんで知ってるの？」
「ああ、それは簡単だよ。言っていいですか？織斑先生」
「まあ何れバレることだし言ってもいいだろう」
「ありがとうございます。僕が２０００個を超えてるのを知ってる理由は、束さん・・・篠ノ之博士と友人関係にあるこ

・・

とも多少有りますが、本当の理由は篠ノ之博士にコアを一つもらって解析したんですよ」
「解析したのと知ってるのとどう関係があるの？普通なら完全なブラックボックスのはずだよ」
「そんなの簡単にして単純。解析を成功させたからだよ。ちなみに解析を成功させて、僕はコアを作れるから、その約１５００個のコアは僕が作った数だよ」
「「「「「「「「ええ～～～～～～～～～」」」」」」」」
「そ・・・その話は本当ですの！織斑先生」
「ああ、本当だ・・・全く、胃が痛くなる」

「あ、ちなみに僕のＩＳは自分で作ったものだよ、コアから全て」
「あ、すみません横道にそれました。山田先生、続きを」
「はい、分かりました。皆さん教科書１７ページを―――――」

～２時間目が終わった瞬間ｗ

「３時間目はグラウンドでの訓練だ。各自遅れないように」
「拓海～更衣室いくぞ～」
「ああ、先に行っててくれ」
「まさかお前女「馬鹿かお前。ＩＳの量子変換技術を応用して０．０００００００００１秒で着替えるように出来る奴を使うんだよ。既に全ての服を入れてる。一夏のも明日には渡せると思うから」「わかったよ」

グラウンド
「一之瀬、織斑はどうした」
「分かりませんＩＳの技術の応用で０．０１秒以下で着替えることの出来る装置を作ったので更衣室には行ってませんから」
「そうか、分かった。後私にもその装置をくれ」
「分かりました。明日には完成しますから。量産を開始することがね」
「量産だと、１００個ぐらい収納できますよ」
「ちなみに一夏たちに渡すのは特別タイプで１０００個以上収納できますよ。ちなみにイメージするだけでいけますが、覚えるのが大変なので空中ディスプレイで選択も出来ますよ。まあ量産も同じですが」
「ほう凄いな。っとやっときたか」
「遅いぞ織斑」
「遅いって・・・まだ授業始まってないんですからいいでしょう？」
「まあ・・・」
「まあいい。織斑、オルコット、凰、一之瀬　ＩＳを展開しろて急上昇しろ」

「「了解」」
「わかりました・・・・・・」
「まだ出来んのか」
「もう少しです・・・」白式やっと展開
「ところで一之瀬、前のＲＸ－７８－２とは違うようだが」
「簡単ですよ。あれよりも高いスペックのＩＳを作っただけですよ。第３世代のね」
「名前はガンダムガンダムＭｋ－？です。他にも色々開発途中のが有りますけどね」

「まあいい。急上昇しろ」
「はい」

「早っ」

「織斑、何をのろのろしている、ガンダムＭｋ－？はともかくブルーティアーズより白式の方がスペック上は上だぞ」

「ええと・・・」
「急上昇は確か前方に角錐を展開するイメージ・・・」

「一夏さん　イメージは所詮イメージですわ自分にあった方法を模索するほうが建設的ですわよ」
「そういわれても・・・」
「一夏、とにかくがんばればいいのよ」
「そうだぞ、とにかくがんばればいいから」
「そんなこと言っても・・・」
「大体空を飛ぶ感覚自体がまだあやふやなんだよどうやって飛んでるんだ？」
「別に説明してあげてもいいけど長いよ？」

「反重力力翼と流動波干渉の話になるから・・・大体3時間ぐらいだし」
「いや・・・説明はいいよ」

『一夏っ！！』
『いつまでそんなところにいる！早く降りて来い』
「篠ノ之さんインカム返してください～～～～～」

『お前たち、次は急降下と完全停止をやって見せろ
目標は地表から十センチだ』
「「「「はい」」」」
「じゃあ先に行くね」
ギ――――ィィン
「う～ん9．6センチか」
「次は私ですわ」
ギ――――ィィン
「十センチ丁度ですの」
「次は僕だね」
ギ――――ィィン
「地上から0．03センチか」
「一之瀬、せめて0．1センチにしろ」
「はい、次からはそうします」
「最後は俺だ」
ギ――――ィィン
よし急降下は・・・背中の翼からロケットファイヤーが噴き出すイメージ
「馬鹿者グラウンドに穴を開けてどうする」
「誰が地上に激突しろといった？」
「・・・・・すみません」
「自分であけた穴だ、誰にも頼らず自分で埋めておくように」

「・・・はい・・・」

「織斑く～ん！！」
「あのさ　ちょっと聞きたいんだけど」
「何か用？」
「狂夕食の後って何か用事ある？暇？」
「特に何もないけど・・・」
「本当～？やったぁ！！」
「じゃあ夕食の後ちょっと付き合ってよ！そっちの４人もね」
「「「「え？」」」」

「織斑一夏クラス代表就任パーティー？」
「というわけでっ！」
「織斑くんクラス代表決定おめでとう～～！！」

「対抗戦がんばってね」
「フリーパスのためにもがんばってね」
「分からないところあれば聞いてね」
「あ・・・ありがとう」ハア
「人気者だな一夏」
「本当にそう思うか？」
「ふん」

「お～い一夏こっち来いよ」
「ああ、今行く」

「あっいたいた　織斑く～ん」
「ん？」

「話題の新入生の織斑一夏君と一之瀬拓海君に特別インタビューに来ました」
「新聞部部長二年の黛薫子です」部長に昇格！
「はい　これ名刺！よろしくね～」
「えっとずばりクラス代表になった感想は？」
「まあ・・・なんというかがんばります」
「もっといいコメント頂戴よ～俺に触ると火傷するぜ！とか」
「自分・・不器用ですから」キリッ
「うわ～前時代的～」
「まあそこは適切（適当）に捏造するから良いとして」
「良くないですよ黛先輩」
「まあいいじゃん」
「一之瀬君コメント頂戴。あ、何でクラス代表を辞退したのかで」
「単純に経験をつんで欲しかっただけですよ」
「ふむふむこれは捏造のやりがいが有りそうだ」
「しないでくださいっ！！」

「セシリアちゃんもコメント頂戴～」
「こういうことは余り「長くなりそうだからやっぱいいや」
「織斑君に惚れたからってことにしとこ」
「何を・・・／／／／」
「何を馬鹿なことを」
「え～そうかな～」
「そっそうですわ。何を持って馬鹿としているのかしら」
あれ？何でセシリアが俺に怒るの？」
「じゃあ質問はこんな感じで・・・
最後に４人の写真取らせてよ」

「注目の専用機持ちだしね～」
「あ、握手してね～」
「は～いそれじゃあ」
「１９Ｘ５Ｘ２＋３２は？」
「えっと２２２？」
「正解～」
「ちょっとなんでみんな入っていますの？」
「まあまあセシリアだけ抜け駆けはじゃん」

第6話　転校生はセカンド幼馴染（後書き）

終わり方中途半端で申し訳ございません

主人公設定&主人公機設定（前書き）

そういえば主人公の設定やってないんじゃ・・・ってことで作りました

主人公設定&主人公機設定

名前　いちのせ　たくみ
　　一之瀬　拓海

姿　秘密（作者が考えてないですよ御免なさい）

声　秘密（同上）

性別　男

主人公機

初代ガンダムことＲＸ―７８―２

以下武装

６０ｍｍバルカン砲（内蔵：弾数５０）×２

ビーム・ライフル
（オプションでスーパー・ナパームを装備）

ハイパー・バズーカ

ビーム・サーベル　／　ビーム・ジャベリン×２

シールド

ガンダム・ハンマー

ハイパー・ハンマー

ＲＸ－７８をＩＳにしたような感じです

ガンダムＭｋ－ＩＩ

形式番号　ＲＸ－１７８

武装

・頭部バルカン・ポッド

・ビーム・サーベル×２

・ビーム・ライフル

・ハイパー・バズーカ

・シールド

・拳部マルチプル・ディスチャージャー×２

・ミサイル・ランチャー（劇場版『Ｚ』）

・ロング・ライフル（劇場版『Ｚ』）

ハイwまんまMk－IIですねw

主人公設定＆主人公機設定（後書き）

作者曰く

『最強のガンダムはＺＺだから最終にする』とのことです
しかもＩフィールドとＶＰＳ装甲とＧＮドライブを搭載するらしい
です
まあ簡単に言うと『ＺＺ＋ダブルオークアンタ』らしいです

第7話

「え？」
おいおい何で箒がいるんだ？拓海と鈴とセシリアに教えてもらうはずだったが？
「な・・・なんだその顔は・・・・・・おかしいか？？」
「いや、その・・・「簡単に言うとなんでそんな簡単に訓練機が取れたのかって言うこと」
「簡単に取れるだろ？」
「「「取れないから」」」
「まあ多分運がよかったんだろ」
「そ・・・そうね。そうとしか考えようがないわ」
「（くそっライバルは少ないほうがいいのに・・・）」
箒の睨みつける攻撃ＶＳセシリアの睨みつける攻撃
「はぁ・・・一夏、拓海。先にはじめましょ」
「「そうだな（ね）」」

「って何先に始めてますの！！！！！」
「そうだ！何で先にはじめるのだ」
「なんでってねぇ・・・あんた達が喧嘩してるからでしょう」

「ふぅ～やっと終わった」
「このぐらいで疲れるのか。鍛え方が足りん」
「そうですわ。もう少し鍛えたほうがいいですわ」

「はい、一夏お疲れ～えっとドリンクとはぬるいスポーツドリンクでよかったよね」
「ああ、ありがとう」あれ？鈴ってこんなに可愛かったけ？
「一夏さぁやっぱ私がいないと寂しかった～？」
「ああ、やっぱり遊び相手がいないと寂しいな」
「んん、一夏、私は先に帰る。シャワーは先に使っててていいぞ」
「分かった」
シューーン
「え？一夏、シャワーってどういうこと？」
「ああ、急に転校になったから、強制的に箒の部屋に入れられたんだ」
「へぇ～そうなんだ」殺気を出し始める
「あ、部屋を替わってもらおうって思っても無駄だぞ？」
「なんで？」
「一年の寮長、千冬姉だから・・・・」
「そ・・・そうなんだ・・・・・・諦めるしかないわね」
「そうだ！一夏、約束覚えてる？」
「ああ、え～っと『私の料理の腕が上がったら毎日酢豚食べてくれる？』だったよな。その答えは臨海学校のときでいいか？」
「うん、良いわよ」
やった～一夏が私の好意に気付いてくれた～

～数週間後　クラス代表戦決勝当日～

「一夏、勝って来い」
「ああ、もちろんそのつもりだ」

『決勝戦の試合ルールは簡単。試合開始の合図がなってから1分以内に出撃し、試合をする。合図が鳴ってから、１分以内に出撃しなければ、相手の不戦勝となります』

『試合開始！！』

「織斑一夏　白式　行きます」

相手は量産機、一気に決める！
「はぁぁぁぁぁぁ」瞬間加速で相手に接近！
ちっ相手は射撃形か。だがローリングやバレルロールを使い相手に接近する！
零落白夜！

『４組代表シールドエネルギーエンプティー　勝者1組代表。よってフリーパスの権利は１組に与えられます』

ズドォォォォォン

『こちら管理室。織斑聞こえるな』
「はい、聞こえます」
『もう少しで教師陣が突入する。それまで持ちこたえろ』
「了解」

「山田先生、そこを変わってください。それと突入隊を第１ハッチに集めてください」
「あっはい分かりました」

「ハッキング開始・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・ハッキング終了」
「第1ハッチオープン」
「カタパルトシステムのプログラム完了。順次出撃してください」
「了解」
「織斑先生。僕も出ます。後は頼みます」
「分かった」

「出撃します」

「生体反応検地・・・生体反応無」『織斑先生聞こえますか？相手は無人機です。各機に連絡お願いします』
『了解した』

何なんだこいつ・・・気味が悪い

「はぁぁぁぁぁぁ」
フルバースト

敵ＩＳの停止を確認

敵ＩＳの再起動を確認
「ぜやぁぁぁぁぁぁ」
「これで終わりだぁぁぁぁ！！！！！！！！！」

「ふぅ今度こそ終わりだな」

〜プルルルルプルルルル〜
「あ、兄さん？」
「ああ、俺だ。ＩＳの会社を作ったから、そこに入らないか？」
「別にいいよ。で社員は？」
「今のところ俺だけだ」
「分かった。入るよ」
「で、詳細は？」
「後で端末に送っておく」
「分かった」

名称・・・モルゲンレーテ
社員・・・現在２名（現在募集中）
社長・・・一之瀬　和也
テスパイ・一之瀬　拓海

ブルードライヴ
量産形ＩＳ・・・第２世代最終形　蒼き疾風
性能　中期第３世代に負けないスペック
現在試作中
量産開始は１週間後

「・・・・・・・・・」アハハ
「凄いｗｗｗ」

「あ、織斑先生。明日と明後日に駆けて外出許可及び外泊許可をお願いします」
「理由は？」
「兄が会社を作ったらしくてwそこに行けと。あ、それからＲＸ－７８とＭｋ－ＩＩはモルゲンレーテ所属に変更してください」
「分かった」

第7話（後書き）

ええ、そうなんです
ここの一夏は少し鈍感具合が直ってます
だから、鈴の好意（のみ）は気付いてます
あ、作者はシャルロッ党ですよ

第8話

「ら、来月の学年別個人トーナメントだが・・・」

「話、私が優勝したら」

「け、結婚を前提に付き合ってもらう」

「だが断る。別に買い物だったらいいけど」

「きィ貴様ァ」

「はいはい落ち着け」

「落ち着いてなどいられるか」

〜六月頭、日曜日〜

「で？」

「で？って何？」

「だから女の園の話だよ。いい思いしてるんだろ？」

「してないよ」

「嘘付け嘘を」

「はぁ・・・じゃあＩＳ学園入る？」
「はぁ？どうやって入るんだよ」
「簡単簡単。僕の兄さんのやってる会社のＩＳのテストパイロットという名目で入ればいいんだよ」
「だ・か・らどうするんだよＩＳ動かせないぞ」
「大丈夫、僕の作ったコアは男でも動かせるから」
「・・・・・・は？」
「だ・か・ら僕の作ったコアは男でも動かせるんだよ」
「はぁ？ＩＳのコアなんで作れるんだよ」
「なんでって・・・解析したから？」
「で、その会社の名前は？」
「モルゲンレーテ」
「もう一回頼む」
「だからモルゲンレーテだって」
「え～っとあの設立から１ヶ月もたってないのに大企業の分類に入ったって言うあのモルゲンレーテ？」

「そ」

「いや、でもあそこの就職の倍率１万越えてるだろ」

「モーマンタイ僕のコネでテスパイとして入れる」

「でも俺ＩＳの事全く知らないぜ？」

「大丈夫。え～っとちょっと待ってね」ガサゴソガサゴソ

「あった」

「え～っとなにそれ」

「参考書」

「それは分かるけど何でそんなの持ち歩いてるんだよ」

「持ち歩いてないよ。これに入れてるだけだよ」量子変換バッグ～

「そんなの聞いたことないんだけど」

「当たり前。うちの会社の試作品だし」

「」

「ま、とりあえず読んどいて。ちょっと電話する」

「分かった」

『あ、もしもし兄さん？』

『何のようだ？今職務中なんだけど』

『とりあえず弾会社入れてくれない？』

『分かった。手配しておく』

『ああそれと『第４世代型のＩＳを１つ作ってくれだろ？』そういうこと』

『分かった。でもイメージインターフェイスと展開装甲をつけるのはお前しか無理なんだから帰って来いよ』

『分かった。後で行く』

「でどうなんだ？」

「もうじきモルゲンレーテ所属になるはず。あ、ＩＳ学園行くこと伝えとか無くていいの？」

「あ、そうだった。伝えてくる」

『あ、もしもし千冬さん？』

『なんだ？』

『３人目の男のＩＳ操縦者出たんでお願いできます？』

『名前は？』

『五反田　弾です』

『ふっあいつか』

『ええ。そうです』

『確か一夏のとこ空いてましたよね。僕のほうは転校生が来るから駄目みたいだし』

『そうだな。一夏の部屋にしておく』

『後で詳細を送りますね』

『分かった』

「あれ？織斑先生どうしたんですか？」

「出たんだよ。４人目のＩＳ操縦者が・・・しかもモルゲンレーテ所属の」

「・・・アハハハハ（汗）良く出ますね～」

「そうだな」

「そういえば試作型の第３世代型ＩＳってもうおわって量産型第３世代のＩＳを量産開始するとか言う噂が有りましたね」

「そうだな。今度聞いてみるか」

～え～ここで臨時緊急ニュースが有ります

モルゲンレーテの発表によると量産型第３世代のＩＳを量産開始した模様です

名前は蒼き稲妻（ブルーサンダー）です　臨時ニュースを終わります〕

「噂をすればなんとやらだな」

「ですね」

「お兄！さっきからお昼ごはんできたていってんじゃん。早く降りて着なさ――――」

「あ、久しぶり」「久しぶり。お邪魔してるよ」

「いっ一夏・・・・・・さんと拓海さん！？」

「い、いや来てたんですか？ＩＳ学園に通ってるって聞いてたんですが」

「ああ、ちょっと外出しててここに寄ったんだよ」

「そ、そうですか」

「蘭、お前ノックぐらいしろよ。恥知らずの女だと――――――――」

ギンッ

「・・・・・・なんで言わないのよ」

「い、いや、言ってなかったか？そうか、そりゃ悪かったな」

「・・」

「あ、あの一夏さんたちもお昼どうぞ」

「ありがとう」「ありがとう。頂くよ」

「い、いえ／／／／」

「しかし、アレだな。蘭ともかれこれ三年の付き合いになるけど、まだ俺に心を開いてくれてないのかねぇ～」

「は？」

「この鈍感大魔王が」

「なあ拓海」ムシャムシャ
「なんだ？」ムシャムシャ
「一夏の奴何人惚れさせてるんだ？」
「おれが確認しただけだと学園では３人以上・・・かな？」
「ははは・・・」
「ちなみに今一夏に惚れてるのは全員で４人はいるし・・・」
「ほんとどうなるんだか」
「背中から刺されないといいけどね～」

「だな」

「なあ拓海たち何はなしてるんだ？」
「「鈍感野郎には教えん」」
「鈍感ってwそこまで鈍感じゃね～ぞ」
「「十分鈍感だそれもキング・オブ・鈍感クラスの」」

「――――――決めました」
「私来年ＩＳ学園を受験します」
「え～っと適正は？」
「ＡＡＡ＋です」
「あはははは。だったら企業所属になる？」
「僕のとこだったらコネあるけど」
「考えておいてね」
「分かりました」

「あ、そうだ御代を」
「いえ。タダでいいです」
「で、ですので一夏さんにはぜひ先輩としてご指導願いたいのですが」
「ああ、いいぜ」。憂かったらな」
「あ、ありがとうございます！！」

「じゃあまた今度」「また来るね」
「はい。また～」

「一夏、いる？」
「おう」
「いきなりあけないでよ！びっくりするでしょうが」
「な、何じっと見てるのよ」
「ああ、いやなんでもない」
「夕食食べに行かない？」
「ああ、今行く」

「ねえ、聞いた？」
「聞いた、聞いた」
「え、なんのはなし？」
「だから、あの織斑君と一之瀬君の話よ」
「いい話？悪い話？」
「最上級にいい話」
「聞く！」
「まあまあ落ち着きなさい。いい？絶対これは女子にしか教えちゃ駄目だよ？女の子だけの話なんだから」
「実はね、今月の学年別トーナメントで優勝したら織斑君か一之瀬君と付き合えるんだって～」
「ん？なんだかあのテーブルえらい人だかりだな」

・・・・・・・・・・・・・

「トランプか占いとかやってるんじゃないの？それか優勝したら僕たちと付き合えるとかそういう偽の噂を流してるとかね・・・」

「あ～一之瀬君だ～あの噂って本当？」

「嘘に決まってるよ」

「どんな噂か知ってるの？」

「『優勝したら僕たちのどちらかと付き合える』でしょ？あれだけ声が大きければ嫌でも聞こえるよ」

第9話

「やっぱりモルゲンレーテ製のがいいなぁ」

「え？やっぱり！やっぱデザインと性能の両立が凄いよね～」

「だよね～」

「しかも値段は手ごろ」

「あ、織斑君と一之瀬君のＩＳってどこの奴なの？」

「あー。特注品だって。男のＩＳスーツがないからどっかのラボが作ったらしいよ。えーともとはイングリッド社のストレートアームモデルだって聞いてる」

「僕のはモルゲンレーテ製の量産型を少し改造したもの。まあ量産型と性能は変わらず、ちゃんと銃に撃たれても衝撃も何もないよ」

「ＩＳスーツは肌表面の微弱な電位差を検地することによって、操縦者の動きをダイレクトに各部位へと伝達、ＩＳはそこで必要な動きを行います。また、このスーツは耐久性にも優れ、一般的な小型拳銃の銃弾程度なら完全に受け止めることが出来ます。あ、衝撃は消えませんのであしからず」

「あの～山田先生。モルゲンレーテ製のスーツは中型の拳銃の銃弾程度なら衝撃まで完全にとめれますよ？」

「あ、そうでしたね」アハハ

「山ちゃん詳しい！」

「一応先生ですから。・・・って、山ちゃん？」

「山ピー見直した」

「今日が皆さんのスーツ申し込み開始日ですからね。ちゃんと予習してきてあるんです。えへん。・・・って山ピー？」

「あのー、教師をあだ名で呼ぶのはちょっと」

「え～いいじゃんいいじゃん」

「「「「まーやん」（マヤマ・マヤマヤ・山ちゃん・山ピー）は真面目っこだな～」」」」

「はぁ・・・もういいです」

「諸君、おはよう」

「お、おはようございます」

「今日からは本格的な実践訓練を始める。訓練機ではあるが、モルゲンレーテ製の量産型第3世代機だ。各自気を引き締めるように。各人のＩＳスーツが届くまでは学園指定のものを使うので忘れないようにな。忘れたものは学園指定の水着で訓練を受けてもらう。それすら忘れたものは下着で構わんだろう」

「「「（構うでしょ）」」」

「では山田先生。ＨＲを」

「は、はいっ」

「ええとですね、今日はなんと転校生を紹介します！なんと２名です」

「え・・・・・・」

「「「えええええええ？」」」

「「失礼します」」

クラスに入ってきた二人の転校生を見て、ざわめきがぴたりと止まる。そりゃそうだ

だって、二人とも男子だったんだから

「五反田　弾です。モルゲンレーテに所属しています。テストパイロットという名目で専用機を持っています

よろしくお願いします」

「シャルル・デュノアです。フランスから着ました。この国では不慣れなことも多いかと思いますが、皆さんよろしくお願いします」

「お、男・・・？」

「はい、こちらに僕と同じ境遇の人がいると聞いて本国より転入を
ーーーーーー」

「きゃ・・・」

「はい？」

「キャーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー」

「男子！３、４人目の男子！」

「しかもうちのクラス」

「片方はクールでかっこいい！もう片方は美形！守ってあげえたく
なる系の！」

「地球に生まれてよかった～～～～～～～～」

「あー、騒ぐな。静かにしろ」

「ではHRを終わる。各人は直ぐに着替えて第２グラウンドに集合。
今日は２組と合同でＩＳ模擬戦を行う。以上」

「織斑は五反田。一之瀬はデュノアの面倒を見てやれ。同じ男子だ
ろう」

「分かりました」「了解」

「シャルル、早く行くよ。女子が着替え始める」

「とりあえず男子は空いているアリーナ更衣室で着替え。これから実習のたびにこの移動だからな。早めに慣れてくれ」

「分かった」

「ああ、もう。ＰＩＣ使うか」

「え？校則違反じゃないの？」

「大丈夫だ。ＩＳじゃない。ＩＳの技術を応用したものだからノー問題」

「凄いねｗ」

「じゃあ行くよ」

「うん」

まってくれ～と聞こえたが無視無視

「とうちゃーく」

「じゃあシャルル着替えよ」

「そうだね」

「じゃあ行くよ～つかまっててね」

「うん」

「ふぅ着いた」

「あら？拓海さん。一夏さんたちは？」

「さぁ？面倒なことになる前に逃げてきた」

「そうでしたの」

「一之瀬。なぜＩＳを展開した」

「え？僕がいつＩＳを展開しました？」

「教室から出て直ぐだ」

「ああ、あれはただのＰＩＣを応用して作った反重力装置ですよ。まあ超小型スラスターとしての役割も有りますが」

「そうか。分かった」

「え？拓海。なんでそれで通じるの？」

「それはモルゲンレーテだから」

「・・・なんか妙に説得力あるね」

「でしょ？」

「まあいいや。並んでおいたほうがいいよ」

「そうする」

「織斑。五反田。３５秒の遅れだ」

バシコーン

「それと五反田。今日は初めてだから見逃してやるが、次からはないと思え」

「分かりました」

「ずいぶんとゆっくりでしたわね」

「スーツを着るだけで、どうしてこんなに時間がかかるのかしら」

「４人の男子の二人がいるだけで、相当人数が来るんだよ。特に新聞部が」

「ご愁傷様」

「アンタまた何かやったんじゃないの？」

声はすれど姿は見えず――――ってほんとにどこだ？

「後ろにいるわよ、馬鹿！」

「――――安心しろ。馬鹿は私の目の前にも二人いる」

バシーン

「では、本日から格闘及び射撃を含む実践訓練を開始する」

「はい！」

「くうぅ・・・・・・。何かというと直ぐにポンポンと人の頭を・・・」

「一夏のせい一夏のせい一夏のせい・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「今日は戦闘訓練を実演してもらおう。ちょうど活力があふれんばかりの十代女子もいることだしな」

「凰、オルコット。前へ出ろ」

「な、なぜ私まで」

「専用気持ちは直ぐにはじめられるからだ。いいから前に出ろ」
「だからってどうして私が」
「一夏のせいなのになんでアタシが・・・」
「お前ら少しはやる気を出せ。・・・あいつにいいとこ見せられるぞ」ボソッ
「やはりここはイギリス代表候補生、私セシリア・オルコットの出番ですわね」
「まあ、実力の違いを見せるいい機会よね！専用気持ちの」
「それで相手はどちらに？私は鈴さんでも別に構わなくてよ」
「それはこっちのセリフよ。返り討ちよ」
「慌てるな馬鹿ども。対戦相手は・・・」
「あああああああ退いてくださいーーーーーーーーーーーー」
「ふぅ・・・。白式の展開がギリギリ間に合ったな。しかし一体何事？」
「う？」
「あ、あのう織斑君・・・ひゃん」

「そ、そのですね。困ります。こんな場所で・・・・・・。いえ！場所だけでなくてですね！仮にも教師と生徒でですね」

「ああでもこのまま行けば織斑先生が義姉さんってことで、それはそれで魅力的な―」

「――――ハッ！？」

「ホホホホホホ・・・・・・。残念です。外してしまいましたは」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「うおおおおおおお」

ご愁傷様

「はっ！」

「山田先生はああ見えても元代表候補生だからな。あのぐらいの射撃は造作もない」

「む、昔のことですよ。それに候補生止まりでしたし」

「さて、小娘どもいつまで惚けている。さっさとはじめるぞ」

「あ、あの2対1で・・・・・・・？」

「いや、流石にそれは」

「織斑先生。流石にそれは一方的になるんじゃないですか？」

「別にいいだろう」

「手加減はしませんわ！」

「さっきのは本気じゃなかったしね！」

「い、行きます」

「さて、今の間に・・・そうだな。一之瀬、山田先生の乗っているＩＳを説明しろ」

「分かりました。山田先生の乗っているＩＳはモルゲンレーテ社製の世界初の第3世代型の量産機、蒼き稲妻（ブルーサンダー）です

特にパッケージで高速機動タイプ、攻撃特化タイプ、攻撃タイプ、防御特化タイプ、防御タイプ、高機動攻撃タイプ、バランスタイプの7タイプにでき、参加サードパーティがかなり多いです。また、イメージインターフェイスはマルチロックオンシステムと誘導兵器の2種類が有り、マルチロックオンシステムは一度に多くの敵を倒す場合に。誘導兵器は追加でサポート用のＡＩをつけるようにすると、さいだいで、２０個まで一度に操作できるようになるはずです。あ、それと織斑先生。やっぱり一方的になりましたよ？」

「ああ、そこまでいい。・・・そうだな。もう少しいくかと思っ

たんだが」

「これで諸君にも教員の実力が分かっただろう。今後は敬意をはらって接するように」

「専用機持ちは織斑、凰、オルコット、デュノア、一之瀬、五反田だな。ただ、五反田は専用機を昨日もらって一時進化はしたがそこからはしてないから、五反田以外の専用気持ちがグループになって実習を行う。五反田は織斑のところに入れ」

「各グループリーダーは専用気持ちがやること。いいな？では分かれろ」

「一之瀬君、一緒にやろう」

「織斑君、一緒にがんばろう～！」

「デュノアくんの操縦技術教えて～」

「この馬鹿どもが・・・出席番号順に一人ずつ各グループに入れ！順番はさっき行った通りだ」

「まあいいや、みんな始めるよ。ブルーサンダーでいいよね。注意

点は特に無し。たったまま降りても、自動で降りるようになってあるけど、普通に下がってから降りるように」

その後は特に何も無く終わった
途中、立ったまま降りた人が多く、一人目のときに、山田先生から、僕が載せてあげてくださいといわれましたが、そんなの関係有りません。自動で下がります（キリッ

シャルロットの班は大変そうだったな・・・

第１０話

「シャルロット。何があったか話してもらえる？」

「うん・・・・」

「拓海、僕が愛人の子っていうのは知ってるよね？」

「うん」

「実家・・・デュノア社の方からね、男装してＩＳ学園に行けといわれたんだ」

「ってことは男子と偽り、日本に現れた特異ケースに接触。それに第3世代型のデータを集めるといったところか」

「そうだよ。拓海ごめんね」

「いいよ。シャルロットが悪いんじゃない。悪いのはデュノア社長なんだから」

「拓海、ありがとう。でもね、僕にはもう一つ秘密があるんだ。拓海だから教えるんだよ？」

「そうなんだ。ありがとう」ひょっとしてフラグ建ったの？

「ねえ拓海は転生って知ってる？」

「え・・・転生・・・」

「僕ね、実は転生者なんだ」

「そうなんだ」

「でね、僕の前世の名前は絹本　瑞樹っていうんだ」

「！！」

「そうなんだ」

「そういえば拓海はなんで転生って言っても驚かなかったの？」

「シャルロット、実は僕も転生者なんだ」

「前世の名前は上条　朋希」

「え？・・・朋希・・・ってあの朋希？」

「そうだよ。幼馴染の朋希だよ」

「え・・・嘘、本当に朋希なの！？」

「だから、そうだって」

「あれ？・・・ってことは・・・」

「うん・・・一緒に風呂に入ったときもほんとに恥ずかしかった」

「うん・・・・・・僕もだよ」

「「はぁ・・・」」

「まあいいや、シャルロットはどうしたい？」

「え？でもどうせフランスに強制送還されて代表候補生の座を剥奪、そして牢獄入りだよ？」

「大丈夫。この学校にいる間は問題ないよ」

「え？なんで？」

「忘れたの？ＩＳ学園特記事項「本学園における生徒は、その在学中において、ありとあらゆる　国家・組織・団体に帰属しない。」」

「だからこの学校にいる間は問題ないよ。ここにいる間に何か策を考えればいいさ」

「そうだね。気が楽になったよ。ありがとう」

「あ～でもその格好じゃあ、夕食いけないよなぁ～・・・」

「うん、じゃ「拓海、シャルル、いるか？夕飯食べに行こうぜ」

「あ、ちょっと待って。シャルルが体調悪いみたいなんだ。直ぐに行くから先に行ってて」

「分かった、直ぐに来いよ」

「うん、直ぐに行くよ」

「シャルロット、ごめんね、夕飯取ってくるから」
「分かったよ」

「シャルロット、夕飯もってきたよ」
「ありがと・・・ッ」
「ああ、この体じゃあ、箸もてないのか・・・」
「うん・・・」
「フォークかなんか持ってくるよ」
「いいよ、がんばって食べるから」
ポロ、ポロ、ポロ
「もう、シャルロットも少しは甘えたらどうだ？」
「じゃあ、あのね？拓海が食べさせて？」
「え？ああ、うん分かった」

うう・・・上目遣い＋涙目は卑怯だよ・・・そんな事されたら断るに断れないよ・・・・・・・
うう・・・ドキッとする

「はい、あーん」

「あーん」

「どうだ？」

「おいしい」

「次は和え物がいいな」

「分かった。あーん」

「あーん」

「あ、シャルロット、お茶いる？」

「うん、もらうよ」

「ありがと――――きゃっ」

「あちち。水っ、水ッ」

「ごめん・・・大丈夫？」

「いや、大丈夫なんだけど、む、胸が当たってるんだけど・・・」

「当ててるの♪というネタは置いといて・・・」

「拓海のえっち・・・・・・」

「・・・・・・」ズドーン

「ん？どうしたの？」

「いや・・・」

「その・・・む、胸が見えそうなんだよ・・・」

「だから、その・・・チャックを上げてくれ」

「ひょっとして見たいの？拓海のえっち」

「まあ、確かに見たいけど・・・ってそうじゃなくて駄目だろ。シャルロットみたいな可愛い子がそんなこと言っちゃ」

「え？可愛い？僕が」

「可愛いでしょ。どう見ても」

「そう？えへへへへ」

「それじゃあもう寝るよ。シャルロットお休み」

「お休み」

「もう・・・見たいなら見たいって言ってくれればいいのに・・・
前世の時から好きだったし、今も好きだし・・・ね」

第１０話（後書き）

さて、一之瀬　拓海今すぐそこを変われ、俺だって、俺だって、シャルにキスしてもらうんだぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ

拓海「あー作者が暴走してるので終わりま～す」

シャル「じゃあね～」

第11話

「え～今日は昨日転入するはずでしたが、一日遅れた人が着ます」

「入ってきてください」

「ラウラ・ボーデヴィッヒだ」

「え～っと他には」

「以上だ」

「・・・ッ貴様が」

ボーデヴィッヒが一夏を殴った。何故だ？よしこういうときの原作知識だ

・・・あ～なるほど。一夏が誘拐されて織斑先生が決勝戦を棄権して助けに行ったと

そういうことね～つまり逆恨みかw

キングクリムゾン　時間設定、織斑先生を連れ戻そうとする所

「教官！何故このようなところで教師をしているのですか！」

「やれやれ・・・」

「このような極東の地で何の役目があるというのですか」

「お願いです教官。我がドイツ軍で再びご指導を。ここではあなたの能力を半分も生かされません。」

「ほう」

「大体、この学園の生徒など教官が教える意味などある人間では有りません」

「なぜだ？」

「意識が甘く、危機感に疎く、ＩＳをファッションか何かと勘違いしている」

「そのような程度の低いものたちに教官が時間を割かれるなど勿体

無いです」
「――そこまでにしておけよ、小娘」
「っ・・・・・・！」
「少し見ない間に偉くなったな。１５歳で選ばれた人間気取りとは恐れ入る」
「わ、私は・・・・・・」
「さて、授業が始まる、とっとと教室に戻れよ」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
「さて、織斑。盗み聞きか？異常性癖は感心しないぞ」
「何でそうなるんだよ！大体拓海もいるだろ、千冬姉」
バシーン！
「学校では織斑先生と呼べ。一之瀬はいないぞ」
「は・・・はい」拓海め・・・逃げやがったな
「そら、走れ劣等生。このままじゃお前は来月のトーナメントで初戦敗退だぞ。勤勉さを忘れるな」
「分かってるって千冬姉」
バシーン
「何度言わせるつもりだ。織斑先生だ」

「すみません。じゃあ教室に戻ります」

「おう。急げよ。――――ああ、それと織斑」

「はい？」

「廊下は走るな・・・・・・とは言わん。ばれない様に走れ」

「了解」

――

放課後までキングクリムゾン

――

「さてと、第3アリーナで自主訓練するか」

「ってあれ鈴とセシリアじゃんか！ダメージレベルがもう直ぐでCを超える！というか超えてる！」

『織斑先生聞こえますか？現在第3アリーナで代表候補生3人が模擬戦中。その内、鈴とセシリアのダメージレベルがCを超えました。このままではレッドゾーンに突入します。時間は稼ぎますから早く来てください』

『分かった』

『瞬時加速（イグニッションブースト）』

「はぁぁぁぁぁ。やめろぉぉぉ」

カキンカキンカキンカキン

「一夏聞こえるな。早く第3アリーナに来い。訓練するために近くまで来てるんだろ？。ボーデヴィッヒとの模擬線で鈴とセシリアのダメージレベルがCを超えてるから早く保健室に連れて行け」

「分かった」

「離せ～」

「ふっ雑魚が一匹増えた位で変わらん」

「鈴、セシリア聞こえるか？今一夏がこっちに向かってきてるはず

だから、一夏に保健室に連れて行ってもらえ」

「「分かった」」

「鈴、セシリア、大丈夫か？」

「大丈夫じゃない。早くしなさいよ」

「私もですわ」

「逃がすかァァァ」

ガキンッ！

「・・・やれやれ、これだからガキの相手は疲れる」

「ふぅ・・・やっと来た。まあ早いですけど」

「模擬瀬をやるのは構わん。だがダメージレベルがCを超えたＩＳがあるとすれば、教師として黙認できん。この決着は学年別トーナメントでつけてもらおうか」

「教官がそうおっしゃるのなら」

「織斑、デュノア、一之瀬、お前たちもそれでいいな」

「あ、ああ」

「教師には『はい』で答えろ。馬鹿者」
「は、はい」
「僕もそれで構いません」
「構いません」
「では、学年別トーナメントまで私闘の一切を禁止する。解散」

「・・・・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・・」
「別に助けてくれなくて良かったのに」
「あのまま続けていれば勝っていましたわ」

「お前らなぁ・・・。はぁ、でもまあ、怪我がたいしたこと無くて安心したぜ」

「こんなの怪我のうちに入らな――――――いたたた」
「そもそもこういって横になっていること事態無――――――つううっ！」

馬鹿なんだろうか
「馬鹿って何よ馬鹿」
「一夏さんこそ大馬鹿ですわ」

「なんでそうなるんだよ」

「好きな人に格好悪いとこ見られたから恥ずかしいんだよ」
「だよなぁ」
「ん？どういうことだ？」

「ななな、何を言ってるのか全っ然っ分かんないわね！こここここれだから欧州人って困るのよねぇっ！」
「べべっ、別に私わっ！そ、そういう邪推をされるといささか気分を害しますわねっ！」
「はい、ウーロン茶と紅茶。とりあえず飲んで落ち着いて、ね？」
「ふ、ふんっ！」
「不本意ですがいただきましょう！」

ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド

「織斑君！」
「五反田君！」
「一之瀬君！」
「デュノア君！」
「「「「これ」」」」
「え～っと何々？『今月開催する学年別トーナメントではより実践的な模擬戦を行うため、二人組みでの参加を必須とする。締め切りは――――――』――――――」

「ああ、そこまでいいからとにかくっ！」

「私と組もう織斑君」

「私と組んで五反田君」

「私と組んでよね一之瀬君」

「やっぱり私だよね？デュノア君」

「いや、俺は弾と組むから」

「僕はシャルルと組むから」

「まあ、そういうことなら・・・・・・」

「他の女子と組まれるよりはいいし・・・」

「男同士っていうのも絵になるし・・・・・・ごほんごほん」

「ふう・・・・」

「あ、あの一夏――――――」

「一夏っ」

「一夏さん！」

「あたしと組みなさいよ！幼馴染でしょうが」

「いえ、クラスメイトとしてここは私と」

「駄目ですよ」

「二人のＩＳはダメージレベルＣを超えています。当分は修復に専念しないと、後々重大な欠陥を生じさせますよ。ＩＳを休ませる意味でも、トーナメントに参加することは許可できません」

「うう・・・分かりました・・・・・・・・・・・・」

「不本意ですが・・・非常に！非常にっ！・・・・・・・不本意ですが！トーナメント参加は辞退します・・・・・・」

「あ、あのね、拓海っ」

「なに？」

「あの、遅くなっちゃったけど・・・助けてくれてありがとう」

「うん？僕何かした？」

「ほら、保健室で。トーナメントのペアを言い出してくれたの、凄くうれしかった」

「いや、気にしないでいいよ・・・・・・それに好きな子と組めてうれしかったし（ボソッ

「え？拓海、なんていったの？最後のほう」

「え？あ、いや。なんでもないよ？」

「そっか。じゃあいいけど」

「ところでさあ、シャルロット、僕しかいないときは、無理に男口調にしなくてもいいよ？僕はどっちでもいいんだけどね」

「う、うん。僕――――私もそう思うんだけど、ここに来る前に徹底的に正体がばれないようにするために叩き込まれたから、離れないんだ」

「そっか・・・・・・ごめんね。変なこと聞いちゃって」

「で、でも、その・・・・・・やっぱり女の子っぽくない、かな？」

「自分のことを『僕』って言うとか？」

「そ、そう。女の子っぽくないんだったら、拓海と二人きりのときだけでも普通に話せるようにがんばるけど」

「いや、無理はしなくていいよ。それに女の子っぽくないとか、そういうことはないよ。僕は、シャルロットは可愛いと思うよ？」

「か、可愛い？・・・・僕が？・・・・ほんとに？嘘ついてない？」

「ついてないよ。ほんとに可愛いよ」

「そ、そう・・・・・なんだ。――――うん、じゃあ、別にいいかな」

「あ、そういえば制服のままだったね、着替えよっか」

「そうだね」

「あ、僕外に出てるよ」

「えっ？どうして？」

「いや、僕がいたら着替えられないでしょ？ＩＳスーツの着替えも難儀してたし、しばらく外に出てるよ」

「いや、いいよ、そんなの拓海に悪いし、その・・・僕は気にしないから」

「いや、遠慮しなくてもいいよ」

「そ、それに男同士なのに着替え中は部屋の外に出たりしたら、変に思われるかもしれないでしょ？」

「それもそうだね」

「じゃあ、僕も着替えることにするよ」

「うん、そうして」

（う・・・まずい、シャルロットはかわいいし・・・意識しちゃう・・・」

「きゃんっ！」

「いたた・・・・・・。足が引っ掛かっちゃった・・・・・・・・・・え？」

「え？」

「「え」」

「きゃ――――」

「ちょ。シャルロット大声出したら駄目だって」

「ごめん・・・・ってええ」

「ん？・・・・ええ」

「シャルロットごめんね」

「拓海、見た？」

「み、見てない、見てないよ」

「じゃあ下着の色は？」

「水色・・・」

「やっぱり見たんだ・・・／／／／」

「ごめんね・・・シャルロット・・・／／／／」

「じゃあ電気消すね？」

「うん。分かった」

「ほんとずるいよ。拓海は。こんなのだから好きになっちゃうんだよ／／／／」

「おやすみ、拓海・・・・・・」

第１２話

「しかし、すごいなこりゃ・・・」

「３年にはスカウト、２年には１年間の成果の確認にそれぞれ人が来ているからね。１年には今のところ関係ないみたいだけど、それでもトーナメント上位入賞者には早速チェックが入ると思うよ」

「まあ男性操縦者にはチェックが入ってるだろうけどね。」

「一夏はボーデヴィッヒさんだけが気になるみたいだね」

「まあ、な」

「自分の力を試せもしないってのは正直つらいだろ」

「でも感情的になるなよ？お前はいつも感情的になって負けてるだろ」

「あ、対戦相手が決まったみたいだから早くいこ」

「そうだね」

「「「「え？」」」」

『Ａブロック第１試合　五反田　弾＆織斑一夏ＶＳラウラ・ボーデヴィッヒ＆篠ノ之　箒』

『試合開始』

「「叩きのめす」」

「おおおお！」

「ふん・・・」

『ＡＩＣ？なあ、拓海、ＡＩＣって何だ？』

『シュヴァルツェア・レーゲンの第三世代型兵器。アクティブ・イナーシャル・キャンセラーの略。感性停止能力』

『まあ簡単に言うと、相手の動きを止めるようにする装置だよ。ただ集中力がかかりすぎる』

「開幕直後の先制攻撃か。分かりやすいな」

「なに、こっちは囮なんでね」

「なに！？」

「よお一夏。箒は倒したぜ」

「おし、じゃあ行くか」

「だな」

「私が次にどうするかは分かるだう」

「させないね」

「これな～んだ。正解はシールドピアースの上位版。普通だったら1発食らえば終わりだよ？」

バコーン

「そんなもの効かん」

「それはどうかな？」

「なっ拡散しただと！？」

「ちなみに拡散した一つにでも当たるとゲームオーバーだよ？」

『一夏、いまだ』

『分かった』

はぁぁぁぁぁ

『零落白夜』

シールドエネルギー残り４０

『こんなところで負けるのか、私は・・・・・・・・・・・・・・・！』

『私は負けられない！負けるわけにはいかない・・・・・・・・・・・・・・・・・・！』

『どうしてそこまで強いのですか？どうすれば強くなれますか？』

『私には弟がいる』

『弟・・・・・・ですか』

『あいつを見ていると、分かるときがある。強さとはどういうものなのか、その先に何があるのかをな』

『・・・・・・よく分かりません』

『今はそれでいいさ。そうだな。いつか日本に来ることがあるのなら会ってみるといい。・・・ああ、だが一つ忠告しておくぞ。あいつに――――――』

だから――――許せない。教官にそんな表情をさせる存在がそんな風に教官を変えてしまう男、それを認められない。認めるわけにはいかない
だから――――――――
敗北させると決めた。あれをあの男を。私の力で、完膚なきまでに叩き潰すと
ならば――――こんなところで負けるわけにはいかない。あの男は、

あれは、まだ動いているのだ。――――動かなくなるまで、徹底的に壊さなくてはならない
そのために私に最強の力をよこせ

Ｄａｍａｇｅ　Ｌｅｖｅｌ……Ｄ．
Ｍｉｎｄ　Ｃｏｎｄｉｔｉｏｎ……Ｕｐｌｉｆｔ．
Ｃｅｒｔｉｆｉｃａｔｉｏｎ……Ｃｌｅａｒ．
《Ｖａｌｋｙｒｉｅ　Ｔｒａｃｅ　Ｓｙｓｔｅｍ》……ｂｏｏｔ．

「あああああああああっ！！！！！」

「ぐっ！一体何が・・・・・・・・・」

「なっゆ、雪平！？」

「なんだよあれは・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・がどうした・・・・・・・・・・・・・・」

「それがどうしたああっ！！！！」

「うおおおおおおおおおおおおっ！！！！！！！！！！」

「馬鹿、シールドエネルギーがもうほとんど無いだろ！！」

「それでもいかないといけないんだ。アレはあれは千冬姉だけの刀なんだ！！」

「はぁ・・・仕方ねえな。コア、バイパス接続。エネルギーの流出を許可。
一夏、もし負けたら、明日から1週間。女子の格好で通ってもらうぞ」

「なっ・・・・・・・・・・・・・・い、いいぜ？なにせ負けないからな」

「ぎ、ぎ・・・・・・ガ・・・・・・・・・」

強さとは――――なんなのか

『強さっつーのは心の在処。己の拠り所。自分がどうありたいかを常に思うことじゃないかと俺は思う』

・・・・・・・そう、なのか？

『そりゃそうだろ。自分がどうしたいかわからないと強い弱い以前に歩き方を知らないってことだろ』

・・・・・・歩き・・・・・方・・・・・・・・・・。

『どこへ向かうか。どうして向かうか。さ』

・・・・・・・どうして向かうか・・・・・・・。

『つまり、やりたいもん勝ち。えんりょうとか、我慢とか、そんするぞ？』

略

「う、あ・・・・・・・・・・・」

「気がついたか」

「私・・・・・・・・・・・は・・・・・・・・・？」

「全身に無理な負荷がかかったことで筋肉疲労と打撲がある。しばらく動けないだろう。無理をするな」

「何が・・・・・・・起きたのですか？」

「ふう・・・・・・・・・一応、重要案件である上に機密事項なんだがな」

「ＶＴシステムは知っているな？」

「はい」

「そのＶＴシステムがお前のＩＳに搭載されていた」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「巧妙に隠されていたがな。操縦者の精神状態、機体の蓄積ダメージ、そして何より操縦者の意思・・・いや願望か」

「それがそろうと発動するようになっていたらしい。今、ドイツ軍関係者は取調べを受けているだろう」

「私が・・・望んだからですね」

「ラウラ・ボーデヴィッヒ！」

「は、はいっ！」

「お前は誰だ？」

「わ、私は・・・・・私・・・・・・・は・・・・・・・・・・・」

「誰でもないならちょうどいい。お前はこれからラウラ・ボーデヴィッヒだ」

「この学校には後最低３年は在籍しなければならない。その後も死

ぬまで時間はある。たっぷり悩めよ15歳」

「あ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「ああ、それから。お前は私にはなれないぞ」

「あいつの姉はこう見えて心労間が絶えないのだ」

「ふ、ふふ・・・・・・・・・・・・・・・・はは っ」

『トーナメントは事故により中止されました。ただし、今後の個人データ指標と関係するため、全ての第1試合は行います』

『場所と日時の変更は各自個人端末で確認の上――――――――――――――――』

「やっぱりシャルルの言うととおりになったな」

「そうだねぇ。あ、拓海、七味とって」

「はいよ」

「ありがと」

「ふー、ごちそうさま。学食といい寮食堂といいこの学園は本当に料理がおいしくて幸せだよなぁ、シャルル」

「ほんとにそうだよね。この値段でこの美味しさだもんね」

「優勝・・・・・・・チャンス・・・・・・・消え・・・・・・・」

「交際・・・・・・・無効・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・うわあああああああんっ」

「どうしたんだろう」

「さあ・・・・・・・？」

「そういえばさ箒先月の約束だが、付き合ってもいいぞ」

「――――――――。――――――――、なに」

「だから、付き合ってもいいって・・・・・・おわっ！？」

「ほ、ほ、本当か？本当に、嘘ではないのだな！」

「お、おう」

「な、なぜだ？り、理由を聞こうではないか・・・」

「そ、そりゃ幼馴染の頼みだからな。付き合うさ」

「そ、そうか！」

「買い物ぐらい」

「・・・

「あ、男子のみんなここにいましたか。さっきはお疲れ様でした」

「山田先生こそ。ずっと手記で疲れなかったですか？」

「いえいえ、私はああいうの昔から得意だったので問題ありませんよ」

「朗報です。何とですね！今日からついに男子の大浴場が解禁です！」

「そうなんですか！？てっきり来月からになると思ってたんですが」

「それがですねー今日はボイラー点検があったので、生徒たちが使えない日なんです」

「でも点検自体は終わったので、それなら男子のふたりに使ってもらおうって計らいなんです」

「ありがとうございます」

～部屋～

「あ、そうだ一夏、弾」

「「なんだ？」」

「ごめんね」

バコン

「「な、なにするんだよ」」

「悪く思わないでね」

〜大浴場前〜

「ああ、一之瀬君、デュノア君。きましたか。あれ？織斑君と五反田君は？」

「ああ、部屋でちょっと寝てるみたいです」

「そうですか。分かりました。じゃあごゆっくりどうぞ」

「ありがとうございます」

「シャルロット、僕はいいから、シャルロットが入ってきなよ」

「いや、悪いよ。拓海が先に入りなよ。僕は拓海が出てきてから入るからさ」

「分かった。ごめんねシャルロット」

「ううん、気にしなくていいよ」

ガラガラガラガラ

「お邪魔・・・します」

「シャルロット？」

「あんまりこっち見ないで。拓海のえっち」

「あ、ご、ごめん」

「僕が一緒だと、嫌？」

「ううん、違う」

「でももう十分に堪能したから出て行くよ」

「まって・・・その大事な話があるの。拓海に聞いてほしい」

「分かった」

「その・・・前に言ってたことなんだけど」

「前って言うと・・・学園に残るって話？」

「そ、そう。それ。僕ね、ここにいようと思う。僕はまだここだって思える居場所を見つけられてないし、それに」

「それに？」

「・・・

「そ、そうか」

「それにね、もう一つ決めたの」

「もう一つ・・・・・・？」

「そう。僕のあり方。拓海が教えてくれたんだよ？」

「そうだっけ？」

「そうだよ。ふふっ。拓海って自分に関することって、他のみんなよりはいいけど鈍感だからね」

「ごめんね・・・」

「いいよ。許してあげる」

「あ、あのシャルロット。あ、あのいつまでもこの体勢だと・・・・・・その・・・り、理性がいつまで持つか分からないんだ」

「あ、ああっ、うんっ！そうだねっ！、僕体と髪あらっちゃうね」

「こ、こっち覗いちゃ駄目だよ」

「の、覗かない・・・というより除けないよ」

「あはは、拓海らしいね」

「じゃあ戻るか」

「うん」

「今日は、皆さんに転校生を紹介します。転校といいますか、既に自己紹介が済んでいるといいますか・・・ええと」

「じゃあ入ってきてください」

「失礼します」

「シャルロット・デュノアです。皆さん、改めてよろしくお願いします」

「ええと、デュノア君はデュノアさんでした。ということです。はぁぁ・・・また寮の部屋割りを組み立てなおす作業がはじまります・・・・・・・・・・・」

「え？デュノア君って女・・・・・？」

「おかしいと思った！美少年じゃなくて美少女だったのね」

「って織斑君、同室だから知らないってことは―――」

「ちょっと待って！昨日って確か、男子が大浴場使ったわよね」

「一夏ぁっ！！！」

「死ね！！！！！！！！！！」

「ふーっ、ふーっ、ふーっ」

「・・・

「浮くよ」

「え？何で浮くの？」

「ちょっと待ってて。光学迷彩＆ステルス起動っと」

「これでＯＫ」

「シャルロット、ちょっと下向いてみ」

「うわ～凄いことになってるね」

「でしょ？」

「あ、あっ、あ・・・・・・・・・・」

「アンタねえええええええ！！！」

「待て！俺は悪くない！被害者だ！ラウラに言ってくれ」

「アンタが悪いに決まってるじゃん」

「あら、一夏さん？どこへお出かけですか？私、実はどうしてもＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩしないといけないことがありますの」

「ええ、今すぐにですわ。おほほほほほほほ」

「一夏貴様どういうつもりか説明してもらおうか」

「説明してもらいたいのはこっちだ」

「ちょ弾助けてくれ」

「☆Ｉ☆ＹＡ☆ＤＡ☆」

「そ、そんな～」

「さて、お前たちどういうことか説明してもらおうか」

「はい、僕とシャルロット以外の専用機持ち全員がＩＳを展開し、一夏に攻撃を仕掛けました」

「理由はおそらく、ＨＲのときにラウラにキスをされたからだと思います」

「また、箒も、真剣で一夏をきりつけようとしていました」

「僕とシャルロットは混乱が凄かったので、モンゲンレーテの作ったＰＩＣを応用した装置と光学迷彩及びステルスを使い、宙に浮いてました」

「分かった。一之瀬とデュノア以外の専用機持ちと篠ノ之は後で反省文５００枚を提出しろ」

『わ・・・・・・・・分かりました』

その日文字通りクラスが、いや学校が揺れた

第１３話

「拓海、ゴメンね、手伝ってもらってさ」

「いや、いいよ」

「でも、良かったの？今日はセシリアたちと街に行く予定だったんでしょ？」

「いいんだよ。大体、シャルロットがいないんなら行ってもしょうがないしね」

「えっ？」

「まあ、なんだ。プリントの手伝いでも、好きな相手と一緒の方がいいってこと／／」

「拓海」

「シャルロット」

「・・・・・・・・・・・・・・・夢」

（ああ、後１０秒ぐらい見れてたらな～）

（が、学校の廊下でなんて・・・）

（ぼ、僕は何を考えてるんだろう）

「あれ？ラウラはどこに行ったんだろう？」

「・・・・・・まあいいや」

「この大馬鹿どもがぁ！！！

「珍しいな、二人とも。寝坊なんて」

「「た、たまたまだよ」」

「「いただきます」」

「「・・・

「うん」

「拓海、飛ぶよ」

「え？」

「到着っ！」

「おう、ご苦労なことだ」

「本学園はＩＳの操縦者育成の為に設立された教育機関だ。そのためにどこにも属さず、故にあらゆる外的権力の影響を受けない。が、しかし敷地ないでも許可されてないＩＳの展開は禁止されている」

「意味は分かるな？」

「「は・・・はい・・・申し訳ございません」」

スパパーン

「デュノアと一之瀬は放課後教室を掃除しておけ。二回目は反省文提出と特別教育室での、生活をさせるのでそのつもりでな」

「「はい・・・・・」」

「今日は通常授業の日だったな。ＩＳ学園生とはいえお前たちも扱いは高校生だ。赤点など取ってくれるなよ」

「それと、来週からはじまる郊外特別実習期間だが、全員忘れ物な

どするなよ。3日間だが、学園を離れることになる」
「自由時間では羽目をはずしすぎないようにな」

〜放課後〜

僕たちは今、罰で掃除をしている

「シャルロット、無理するなよ。机運びは僕がやるから」
「大丈夫だよ。これでも専用機もちなんだし、体力は人並みに――
――きゃ」
とっさにシャルロットを支える
「シャルロット。大丈夫か？」
「うん、平気だよ。ありがとう」
「お礼をされるほどのことはしてないよ」

「ふぅ〜終わった〜シャルロット。お疲れ様」

「そっちこそお疲れ様」

「あ、そうだ。シャルロット。週末の日曜日用事ある？」

「いや、ないよ？」

「そっか。じゃあ買い物に行かない？確かシャルロットって水着無かったでしょ」

「うん」

「あ、そうだこれ渡しとくよ」

「えっと・・・なに？これ」

「モルゲンレーテのＩＳの量子変換を応用したやつだよ。これだったら荷物は持たないで済むしね」

「ありがとう」

～日曜日～

「シャルロットお待たせ」

「ううん。そんなに待ってないよ。あれ？何でＩＳ学園の制服なの

？」

「そのほうが絡まれる可能性も低くなるからだよ」

「そういうことか。モノレールのろ？」

「そうだね」

「そういえばさ、何で僕を誘ってくれたの？」

「シャルロットが水着を持って無いのは知っていたから、一緒に買いに行こうと思ってね・・・・・それに好きな人と一緒に行きたかったというのもあるけどね」（ボソ

「そっか」

「あ、そうだシャルロット、手つながない？」

「そうだね」

「なあ、シャルロット、もうシャルロットって名前みんな知ってるし、二人だけの名前なんか考えないか？」

「え？ほんと？うん」

「そうだな～シャルなんてどうだ？」

「シャル、うん、いいよ、すっごくいい」

「そっか良かった」

「あ、そうだ、ちょっと待って」

「え～っと鈴とセシリアと一夏とラウラと箒がつけてきてるな。よし、メール送る」

「分かった」

差出人

一之瀬　拓海

本文

つけてくるのやめてくれる？

迷惑なんだけど

まだつけてくるのならあとでＯＨＡＮＡＳＨＩするからね

そういうことだからつけてくるのやめといてね

「シャル、つけてきてた人たちにメール送っといたよ」

「ありがと」

「さ、行こ」

「うん」

「あ、ここでシャルとは一旦お別れだな。３０分後にここでいい？」

「うん」

あ、そうだアクセサリー買っておこ

後ついでに箒の誕生日プレゼントも買っておかないと

「シャルお待たせ・・・というよりもう水着えらんだの？」

「いや・・・その拓海に選んでもらおうと思って」

「そっか。分かった」

「シャル、これなんてどう？」

「うん、いい、すっごくいいよ。これにするね」

「うん。あ、僕が払っておくよ」

「え～いや、悪いよ」
「大丈夫だって・・・それにデートみたいなもんだしね」
「うん・・・分かった」
「ちょっとあなた。そこのあなた」
「僕ですか？」
「そうよ。これ片付けといてね」
「自分で片付けたらどうですか？あなたのやったことでしょう」
「なっあ、あなたの立場がどんなものか知っているの！？」
「ええ、知ってますよ。あなたよりもかなり上ということがね」
「へ～あなたそんなこと言うんだ。私が誰だか知ってるの！？女よお・ん・な男は女に逆らえないの知ってるの！？」
「ええ、普通の男でしたらね」
「ちょっと警備員さ～ん。この男が暴力を振るってきました」
「はい。とりあえずあなたの身分証明書を出してもらえますか？」
「ええ、分かりましたえ～っとありました」

「なっＩＳ学園」

「あなたの立場分かってますか？あなたの方が断然低いってことです」

「急いでますので失礼します」

「シャル、ごめん待たせたね」

「ううん、大丈夫だよ」

「あ、千冬さん、山田さんこんにちは」

「ああ、拓海か。ここは女性用の水着売り場だぞ何をしている」

「いえ、シャルの水着を選んであげただけですよ。それと一夏と鈴が一緒の更衣室に入っていったのを見かけたんですが大丈夫ですか？」

「大丈夫だろう。どうせ直ぐにぼろを出すだろうしな」

「そうですね。じゃあ僕たちはこれで失礼します」

～臨海学校初日～

「そろそろも目的地に着く。全員ちゃんと席に座れ」

「それではここが今日から3日間お世話になる花月荘だ。全員従業員の仕事を増やさないように注意をしろ」

「「「よろしくお願いします」」」

「はい、こちらこそ。今年の一年も元気があってよろしいですね」

「あら、こちらが噂の・・・？」

「ええ、まあ今年は男子が二人いるせいで浴場分けが難しくなって申し訳ございません」

「いえいえ、そんな。それにいい男の子たちじゃないですか。しっかりしてそうな感じを受けます」

「一之瀬　拓海です　3日間よろしくお願いします」

「感じがするだけですよ。挨拶をしろ、馬鹿者」

「お、織斑一夏です。よろしくお願いします」

「あらあら、織斑先生ったら、弟さんにはずいぶん厳しいんですね」

「いつも手を焼かされていますので」

「それじゃあ皆さん、お部屋にどうぞ。海に行かれる方は別館の方で着替えられるようになっていますから、そちらをご利用ください。場所が分からなければ従業員にお聞きください」

「ね～ね～おりむ～たっくんとだっくん」

「おりむ～とたっくんとだっくんの部屋ってどこなの？一覧に書いてなかったし～遊びに行くから教えて～」

「いや、俺たちもまだ聞いてないんだ。ひょっとしたら廊下で寝るのかも」

「あはは～廊下～冷たくて気持ち～よ～」

「織斑、お前達の部屋はここだ」

「ああ、教員室の隣ですか。確かにここならうるさかったら、直ぐに聞こえますもんね」

「そういうことだ」

「じゃあ泳ぎに行ってきます」

「ああ、行ってこい」

「なあ、箒、これってやっぱり・・・」

「知らん。私は知らん。抜くなら勝手に抜け」
「あれ？一夏さん、何をなさっているで・・・きゃなにするん・・・で・・・す・・・の・・・・・・」
「ちょっと早く逃げないと危ないですわ」
「そうだな」
「ん？一夏何やってるの？」
「ああ、うさぎが降りてくる」
「うさぎ？ああ、あの人か」
ズドォォォォン
「「「に、にんじん」」」
「やあやあいっくんにたっくん久しぶりー」
「「お久しぶりです。束さん」」
「うんうんほんとにおひさだねー。それはそうとたっくん。あの自動お着替え機と量子変換バッグはコア使ってるでしょ～」
「ええ、使ってますよ。ただ取り出そうとしたら爆発しますけどね」
「あはは～それならいいや。さすがたっくん私と同じぐらい天才だね～」

「ありがとうございます」

「あの～一夏さん。あの方は誰ですか？」

「束さん・・・篠ノ之束博士だ」

「篠ノ之博士って・・・ＩＳの開発者の！？」

「そう。その束さんだ」

第13話（後書き）

一日に3回更新

疲れた〜

第１４話

「わ～ミカってば胸おっきー。また育ったんじゃないの？」

「きゃあ！もう！」

「ティナって水着だいたーん。すっごいね～。」

「そうでもないよ。アメリカなら普通だよ？」

「なあ、一夏、弾。こういう話やめて欲しくない？」

「ほんとそうだな」

「だよな～」

「あ、織斑君と一之瀬君と五反田君だ～」

「う、うそっ！わ、私の水着変じゃないよね。大丈夫だよね」

「わ、わ～体かっこい～。鍛えてるね～」

「織斑君～一之瀬君～五反田君～あとでビーチバレーしようよ～」

「時間があればね」

「「時間があったらな」」

「い、ち、か～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～っ！」

「ちょ。鈴何するんだよ」

「あ～高い高い～。え？何してるかって？移動監視塔ごっこ」

「鈴さんなにをしてらっしゃいますの？」

「だ・か・ら肩車。もしくは移動監視塔ごっこ」

「というか鈴、早く下りてくれよ」

「いや」

「だったら海に放り投げるか」

「い、いや～トラウマなの知ってて言ってるでしょ～」

「当たり前」

「・・・・・・・・・・・・・・分かったわよ。降りるわよ」

「あ、そうだ一夏さん。サンオイルを塗っていただけませんこと？」

「ああ、それぐらいなら」

「ではお願いしますは、一夏さん」

「あ、ああ。塗るぞ」

「ええ、お願いしますわ」

「きゃっ冷たっ」

「い、一夏さん。て、手で暖めてから塗っていただけませんこと？」

「あ、そ、そうなのか。すまんな初めてだったから」

「は、初めてでしたの。な、なら仕方有りませんわね」

「せ、背中だけでよかったよな」

「え、えっと足と・・・その・・・お、お尻の方も」

「断る」

「あ～はいはい。一夏向こう行ってて良いわよ～」

「そ、そうかありがとう」

「さ～私が隅から隅まで塗ってあげるわよ」

「あ、きゃ、り、鈴さんやめて。きゃっ冷たい」

「あ～ここも塗らなくちゃね～」

「ふぅ～終わったわよ～」

「もう・・・鈴さんのせいで酷い目にあいましたわ」

「よ～し一夏、向こうのブイまで競争よ。負けたら@クルーズのパフェおごりなさいよ」

「あ、分かった」

「よーいドン」

「!?ごぼぼっ!」

い、一夏たすけて!お願い」

「鈴?・・・鈴!!」

「鈴、大丈夫か!?」

「うう・・・何とか・・・」

「無理するなよ」

「う、五月蝿いわね」

「五月蝿いって・・・人がせっかく心配してやってんのに」

「そ、その・・・ありがとう」

「まあ、別に礼はいらないけどなw」

「はあ、もういいわ」

「鈴、とりあえず休んだら？」

「だ、大丈夫よ」

「いえ、休むべきですわ」

「そうだぞ！休むべきだ」

「さあ、鈴さん行きましょう」

「そうだ！行くぞ」

「あ、一夏こんなところに居たんだ」

「ああ、シャルロットか。っていうかそのバスタオルお化けはなに？」

「わ、私だ」

「ラウラか。それ脱いだら？」

「大丈夫だよ。ラウラ。似合ってると思うよ」
「だ、大丈夫かどうかは私が決める」
「大丈夫だろ。見せてくれよ」
「よ、嫁がそういうのなら見せてやろう」
「ど、どうだ／／／／お、おかしいだろ」
「いや、おかしくないぞ。可愛いよ」
「でしょ？可愛いよね」
「ああ、可愛いよ」
「あ、拓海。僕の似合う？」
「うん。似合ってる。可愛いよ」
「えへへ～そっか～ありがとう～」

「ねーねービーチバレーしようよ～」
「ああ、そうだな・・・・・・・・・って・・・・・・」
「どうした？これで終わりか？」

「え～っと織斑先生なにやってるんですか？」
「ああ、今は１ＶＳ１でビーチバレーの勝負をしているんだ」
「どうだ？やるか？」
「ええ、まずは僕から行きます」
「サーブはくれてやる」
「ありがとうございます」
「デバイスセットアーップ」
「スターライトブレイカー」
「甘い。デバイスセットアープ」
「反射」
「なら。スターダストブレイカー！！」
「うぐ・・・こうなったら・・・爆裂パンチ」
「効きません。ファイアトルネード」
「ぐ・・・・・・一生の悔い無し・・・・・・・・・・・・グハ」
「やった・・・勝った・・・・・・・・」バタ

「お、おい大丈夫か？」

「大丈夫だ！問題ない」

「ちょ・・・拓海、復活早すぎるよ」

「そう？普通だけど」

～7時30分頃～

「うん、おいしい！昼も夜も刺身が出るなんて豪勢だよね」

「そうだね。ほんと、IS学園って羽振りがいいよ」

「しかも、このわさび本わさだよ。こんなの普通高校生じゃでないよ」

「拓海、本わさって？」

「ああ、シャルは知らなかったか。本わさっていうのは本物のわさびをおろしたものを本わさっていうんだ」

「え？じゃあ学園の刺身定食のは？」

「あれは練りわさ。原料はワサビダイコンとかセイヨウワサビとかいうのだよ。着色したり、合成したりしてるんだ」

「へ～そうなんだ。じゃあこれが本当のわさびなんだね」

「そう。でも最近のやつは美味しいのも多いよ」

「そうなんだ。はむ」

え？・・・いま・・・わさびの山を食べなかったか？

「っ～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～！！」

「シャ、シャルお茶」

「ありがと」

「だ、大丈夫？」

「ら、らいひょうふ・・・」

「ふ、風味がひゃっておいひいよ・・・・・・」

「そこまで優等生しなくてもいいんじゃない？」

～一夏サイド～

「大丈夫か？セシリア。顔色良くないぞ？」

「だ・・・・・・い・・・・・・じょ・・・・・・・・う・・・・ぶ・・・・・

ですわ・・・・・・・・」

「セシリア、正座が無理ならテーブル席の方に行ったらどうだ？」

「うちのクラスからでも何人も行ってるぞ？」

「へ、平気ですわ・・・・・・。この席を獲得する労力に比べれば、このくらい・・・・・・・・」

「一夏、少しは女心理解してみたら？」

「そんなの、拓海はわかるのか？」

「だれでも多少はわかるよ」

「そうなのか？」

「はぁ・・・この鈍感が」

中略

「セシリア、あとで織斑先生の部屋に来てくれないか？」

「わ、分かりましたわ」

「ふ～さっぱりした～」

なんと海を一望できる露天風呂を3人で使えるのだ

『千冬姉、久しぶりだからちょっと緊張してる？』

『そんな訳あるか、馬鹿者。――――んっ！す、少しは手加減しろ』

『はいはい。んじゃあここは・・・・・・・っと』

『くあっ！そ、そこは・・・・・・やめっ、つっつ』

『直ぐによくなるって。大分たまってるみたいだしね』

『あぁぁっ』

『じゃあ次は』

『一夏、少し待て』

バンッ！！

「「「へぶっ」」」

「なにをしているか、馬鹿者共が」

「は、はは・・・」

「こ、こんばんは、織斑先生」

「さ・・・・・・・さようなら、織斑先生」

「盗み聞きは感心しないが、ちょうどいい。入っていけ」

「「「えっ」」」

「ああ、そうだ。他の二人――――ボーデヴィッヒとデュノアも呼んでこい」

「は、はいっ」

「おお、セシリア遅かったじゃないか。じゃあはじめようぜ」

「え？あ、あの織斑先生もいらっしゃいますし、その・・・・・・」

「？別にいいじゃないか。俺も体があったまってるし、早く始めよう」

「い、いえ、でも、こういうのは、その、ふいんきが・・・」

「・・・・・？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
「セシリア、うつ伏せじゃないとできないぞ」
「え？え？う、うつ伏せでしますの？」
「うん」
「そ、そうですか」
「じゃあはじめるぞ」
「は、はいっ」
「ん、しょっ・・・・・・・」
「！？いたた、いたたたたたたた、い、いい、一夏さん何をして――――――あうううぅっ！」
「何って、指圧」
「し・・・あつ・・・・・？」
「そう、腰の」
「腰の・・・・・・・」
「え、ええと一夏さん部屋に誘ったのは、もしかしてこの・・・・・

」
「おう。マッサージをサービスしてやろうと思ってな。セシリアって班部屋だろ？それじゃあ落ち着かないと思ってな」
「ぶ、無様です私」
「う？ど、どうした。そんない痛かったか？」
「ええ、とても・・・致命的なほどに・・・・・・・・」
「そ、そりゃ悪かった。すまん優しくする」
「もう何でもいいです・・・・・・・・・・・・」
「これぐらいだったら大丈夫か？」
「ええ、気持ちいいですわ」
「それにしてもセシリアは肩のこりが酷いな。何かやってるのか？」
「ええ、バイオリンを。そ、そこはちょっと苦しいです・・・・・・」
「おお、悪い。じゃ、ここは指圧じゃないほうがいいな」
「はぁぁ・・・・。一夏さんって上手でですのね」
「まあ昔から千冬姉にしてたからな、マッサージは」

――――――

「一夏、マッサージはもういいだろう。ほれ、全員好きなところに座れ」

「ふーさすがに二人連続ですると汗かくな」

「手を抜かないからだ。少しは要領よくやればいい」

「いや、そりゃせっかく時間を割いてくれてる相手に失礼だって」

「愚直だな」

「千冬ねえ、たまにはほめてくれても罰は当たらないぜ」

「どうだかな」

「は、はは、・・・・・・はぁ」

「ま、まああたしは分かってたけどね」

『『・・・・・・

「い、いえ」
「このような形で」
「織斑先生と話をするのは」
「初めてですし」
「全くしょうがないな。私が飲み物をおごってやる。篠ノ之、何がいい？」
「ほれ、ラムネとオレンジジュースと、スポーツドリンクにコーヒー、紅茶だ。これぞれ他のがいいやつは交換しろ」
「い、いただきます」
「飲んだな？」
「は、はい」
「そ、そりゃ飲みましたけど」
「な、何か入っていましたの？」
「失礼な。ちょっとした口封じだ」
「「「「「あ、そういうことですか」」」」」
「理解が早くて助かる」

「で、お前達は一夏のどこがいい？」

「まずは篠ノ之からだ」

「わ、私は別に・・・以前より弱くなっているのが腹立たしいだけで」

「あたしは腐れ縁なだけだし」

「わ、私はクラス代表としてしっかりして欲しいだけですわ」

「ふむ、そうか、一夏に伝えておこう」

「「「伝えなくていいです」」」

「で、ラウラは？」

「その・・・強い・・・所です」

「そうか・・・で、デュノア、一之瀬のどこがいい？」

「そうですね・・・・・・優しいところですね」

「一夏は役に立つぞ？家事も料理もなかなかだし、マッサージだってうまい」

「というわけで、付き合える女は得だな」

「どうだ、欲しいか」

「「「「く、くれるんですか？」」」」

「自分で奪え」

「「「えええええええ」」」

「やっぱ自分で奪わないとね」

「分かっているのは一人だけか」

「まあいい。もうそろそろ部屋に帰れよ」

「「「「「分かりました」」」」」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8190w/

IS　二人目の男性IS操縦者は転生者？

2011年10月9日10時46分発行